

## C.A.ドクシアディス(1913-1975)の人間居住科学論とその展開

37-205095 WAN Sichen

### 序

#### 0.1 研究の背景と目的：

「人間居住」(human settlement)は、経済・社会活動の場であり、その結果でもある。1970年代に国連を中心に環境と開発の問題が取り上げられる中でも注目され、1976年『第一回国連人間居住会議』(通称ハビタット I)はまさに「人間居住」の改善が中心課題であることを明確にした。しかし、そもそも「人間居住」に基づいて、人間の社会的・経済的活動を再編成するビジョンは一体どこから来たのか。先進国・発展途上国において、一体どうやってこの概念が確立され、アジェンダを形成してきたのか。

本研究が対象とする建築家・都市計画家・開発専門家のC. A. ドクシアディス (Constantinos, A. Doxiadis, 1913-1975) は、その謎を解くための重要な人物の一人である。本研究の目的は、人間居住科学を意味する概念としてドクシアディスが提唱した「エキスティックス (Ekistics)」に関する論説の形成、発展、伝播を手掛かりに、1950年代以降、その概念の中心地である一方で、欧米の建築界の周辺ともいえる「発展途上国」との関係をとおして、「人間居住」の概念がいかに形成されてきたかを明らかにする。

#### 0.2 研究の対象と方法：

本研究はC. A. ドクシアディス (以下、ドクシアディス) を対象とする。ギリシアの建築家、都市計画家であり、1937年にアテネ工科大学で博士号を取得。1939-50年には、ギリシアの住宅省などで都市・広域計画担当各局の責任者や国連のコンサルタントを歴任した。1951年に都市計画事務所ドクシアディス・アソシエーツ(Doxiadis Associates)を設立。1954年以降、中近東諸国の都市計画を多く手がけた。1955年から1975年までの20年間、都市計画と開発設計の領域で多方面にわたって活躍した。

「エキスティックス」または「人間居住科学」は、ドクシアディスが提唱した概念で、「人間居住」(human settlement)を対象とした研究・計画の体系を意味する。本研究ではこの概念がいかに形成され広がったのかを彼のライフヒストリーとともに描く。

研究方法は史料や文献調査による。主要な一次史料はアテネにあるドクシアディス・アーカイブから取得した論文や書類の他、ドクシアディスによる出版物、1955年から85年まで雑誌『Ekistics』に載せられた文章と記事である。

#### 0.3 既往研究と本研究の所在

既往研究には、C. A. ドクシアディスのある時期の思想とアイデア、特定のプロジェクトと脱植民地化の関係、彼の政界や学界との広い人脈などに関する研究がある。しかし、彼の発展途上国での経験が、いかに「人間居住科学」論に内包され、世界的な「人間居住」概念に持ち込まれたのかはまだ十分に述べられていない。また、国連ハビタットへの帰結と並行して、彼の思想がいかに世界中(特にアジア)の人に受容されたかは注目されていない。本研究は

今日、国連の使う「人間居住」の概念と事業の基盤を形成した見地から、ドクシアディスの途上国の開発専門家という、ある意味で建築・都市論の「周辺」の身分から、いかに人間居住科学を「中心」へと発展させ、伝播させたかを分析して、「人間居住」概念を再検討したい。

### 第一章 途上国との接触と形成中のエキスティックス

#### 1.1 「エキスティックス」の誕生

ドクシアディスは1913年、ギリシア北部の町「stenimachos」で生まれた。彼の最も親しい研究者であり仲間であるジョン・パパイアヌー(John G. Papaioannou, 1915-2000)の追想<sup>1</sup>によれば、ドクシアディスは、アテネでの大学時代とベルリンでの大学院時代にはすでに広域都市計画や学際性に情熱を傾けていた。1937年に博士号を取得すると、ギリシア政府の都市部門で統計と調査に従事し始め、1939年の秋には、政府を説得して「国土計画・地域計画・都市計画調査事務室 (Grafion Chorotaxikon ka' Poleodomikon Meieton kai Erevnon)」を創立した。しかし1940年から1944年の間、ギリシアはドイツとイタリアの占領下にあったため、具体的な都市計画を実践することは不可能であった。したがってドクシアディスとそのチームはこの期間ギリシア国内における約11,000の集落(settlements)について人口規模、密度、歴史文書、戦争被害を含む詳細な調査を行い、アーカイブ化した。その成果は1946年から40巻の報告書として出版され、彼は実験的にその第一巻目を「エキスティックス分析」(Ekistics Analysis)と名前づけた。house, home, habitatなどを意味する名詞のοίκοςと、定住を意味する動詞οικώを語源として使い、「居住」を意味した。

1949年から51年にはギリシアは世界大戦と内戦からの復興と経済回復が大きな課題であり、国際戦略上、アメリカもその復興を手助けた。ドクシアディスは一部の官僚を説得して、戦後復興政策において居住に重点を置かせ、復興調査と計画を担った。しかし1950年12月、政治変動と政策調整で解任され、一時オーストラリアに移住した。1953年にギリシアに戻り、さらに1954年に開発の専門家として国連の地域計画会議に参加したことで、次第に発展途上国で活躍の場を広げた。

#### 1.2 発展途上国での経験

1.2.1 近代化理論と国際開発援助：近代化論(modernization theory)は、リニアな発展段階に基づいた世界認識で、合理的な開発などの近代化によって、貧困な諸国が欧米諸国の享受する経済、政治、社会的状態に到達するという主張である。1950年代から60年代にかけて、近代化論の枠組みに基づいた国際開発援助政策は、西洋の思想と技術の移転の根拠となった。ドクシアディスもまた、経済発展と合理的な開発が発展途上国の人々を幸せにするという信念を持っていた点では近代化論の影響を受けていたが、ローカルな環境条件に目を向ける態度も持ち合

わせていた。

**1.2.2 途上国の現場を捉える経験：**ドクシアディスの考え方の基礎となったのは、途上国のフィールドでの詳細な観察であった。1954-56年にかけて南アジア、中東、北アフリカへと出張した際の日記には、現地の人々がどのように考え、どのようにローカルなやり方で困難に対処しているかをドクシアディスが必死に理解する姿を読み取れる。

1954年、ドクシアディスはインド、シリア、ヨルダンで農業と教育に関する建設・計画プロジェクトに携わるが、彼が最初に引き受けた大きな計画プロジェクトはイラクにおける1955年から五年間の「国家居住計画」(National Housing Program)という長期開発計画であった。1958年から1960年のイラクに関する調査と計画の報告書<sup>2</sup>では、地域の歴史から、住宅建築の材料、年限、人口、コミュニティ、それに連関する経済(農業業態、人口資源など)、政策、交通、自然科学(気候、地理資源など)といった多様な視点から居住問題を捉え、計画案を提示した。万人のために居住計画する考え方と、膨大なデータに対する分析を通じて自らの解決策を支え、設計を客観化する努力は、ドクシアディスの基本姿勢である。

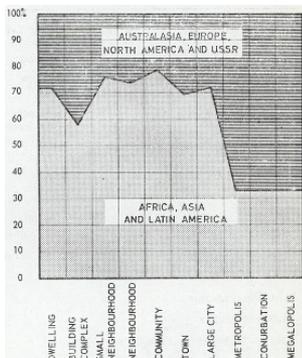


図1 テイルウィットによる雑誌内容の統計(1965)

また、この時期、彼は居住に関する知識の統合と流通に取り組み始める。それが、1955年、ハーバード大学の教員で国連専門家でもあったジャクリン・ティルウィット(Jacqueline Tyrwhitt)の編集協力を得て、1955年に刊行を開始した『Tropical Housing and Planning Bulletin(熱帯住宅と計画会報)』である。

1955年から1965年1月までのこの刊行物の内容をみれば、アジア、アフリカ、ラテンアメリカに関する内容が半分以上を占めていた。

### 1.3 エキスティックスの発展

1957年に上記の刊行物は『Ekistics』と改称し、59年には「人間居住(Human Settlements)の問題と科学に関する概要」という副題が付けられ、「人間居住科学」という概念が明示されるようになる。1958年から60年までに発表した「Architecture, planning and ekistics」(1957)、「The rising tide and the planners」(1958)、「Ekistics, the key to housing in developing」(1959)といった講演録には、人間居住科学の概念と途上国での活動経験との結びつきが表れている。

### 1.4 小結：途上国現場で発展していくエキスティックス論

1940年代、被占領期のギリシアに誕生した「エキスティックス」は、第二次大戦後の復興政策に対して居住の重要性を示すために使われていく。1950年代に入ると、ドクシアディスは開発専門家として途上国で活動するようになり、途上国の異質で苛烈な居住問題に直面する。そのような途上国の国家経済発展という大きなシナリオの中で、当初はギリシアの集落調査を意味した「エキスティックス」は、「人間居住」に関する総合的分析のための科学へと意味を変えていったのである。

## 第二章 「人間居住」の科学

### 2.1 エキスティックスという領域

#### 2.1.1 都市と建築思想の変化：1950年代から70年代にか

け、建築・都市計画論は変化の時代を迎えた。第二次大戦後、イギリスを代表とするヨーロッパでは多くのニュータウンが建設され、アメリカでは地域計画が注目され、衛星都市と高速道路沿いの都市群が現れたが、その一連の現象に対する批判として、①生活・社会面をより重視した「人間」性の回復や、②建築や都市を「環境」という概念から捉え直す考えが現れる。例えば、CIAM VII(1949)からCIAM X(1959)にかけて用いられた「ハビタット」概念やチーム10による「The Doorn Manifesto」(1954)、あるいはハーバード大学大学院の都市デザインコース(1959年～)での教育にもその傾向を読み取ることができる。

**2.1.2 ドクシアディスの呼びかけ：**同様のことは、人間居住科学としてのエキスティックスにも当てはまる。60年代に入ってドクシアディスは書籍や講演<sup>3</sup>でエキスティックスの普及に努めるが、そこでは「普遍的な人間と環境の危機」を呼びかけている。図2 並列された先進国の環境問題と途上国における貧困問題



図2 並列された先進国の環境問題と途上国における貧困問題

しかし、彼の独自性はそれをスラム問題などの途上国の問題と先進国の「都市の危機」を並列させて論じた点だろう。さらには、過度な専門分化を批判し、諸専門家の知を有効的にアサンプルして問題解決することを強調して、建築家や都市計画家の役割を、自己表現するデザイナーから資源を総合的に管理する「マスタービルダー」へと位置づけ直したことも注目に値する。こうした主張を可能にしたのは、建築家・計画家であるとともに、50年代以降国際開発の専門家として国連などのプロジェクトに関わった彼の経験だったとみられる。

### 2.2 エキスティックスの認識論

**2.2.1 エキスティックスの理論化：**ドクシアディスはエキスティックスを普遍的な概念にするべく理論化にも取り組んだ<sup>4</sup>。一人の人間(anthropos)を「人間居住」の中心に据え、対数増長によって個人から都市までのあらゆる居住を階層的に表現した。また、「人間居住」を人・社会・自然・外殻・ネットワーク(man, society, nature, shell, network)の5つの要素から分析することを提唱した。

**2.2.2 人間居住観に影響したマインドセット：**ドクシアディスの人間居住観は、当然ながら周辺の学術的思想と共鳴していた。例えば、「人間居住」を有機体のアナロジーで認識することは、P. ゲデスやF.L. ライトに代表される「都市を有機体として捉える」考え方とシンクロしていた。また、人口の肥大化が継続し、最終的には150億人から500億人の住むグローバル都市ネットワークが現れ、地球の表面を相互連結した一つの人間居住が覆う「エキュメノポリス(Ecumenopolis)」の考えは、同時代の近代化論や生物進化論、人口学と無縁ではない。

### 2.3 エキスティックスの結実

**2.3.1 人間居住の国際研究：**1963年の世界の読者に向けた最初の建築・都市論の出版から、エキスティックスの思想を体系的にまとめた1968年の『Ekistics』の出版、1974年と75年の4冊の「赤い本(The Red Book)」<sup>5</sup>まで、エキスティックス理論自体も変化し、発展していった。

その発展にはドクシアディスが設立した国際研究所Athens Center of Ekistics(ACE)の研究プロジェクトが重要な貢献をした<sup>6</sup>。例えば、1960年からのプロジェクトCity

of Future(COF)は世界各地に出現していたメガロポリス(Megalopolis、特大都市群)に注目し、データに基づく将来予測を行った。1961年からのThe Human Community(HUCO)は、人間居住地のコミュニティに焦点を当て、人間の行動と心理と環境の関係性を環境行動心理学と関連付けて研究した。1968年からのThe Ancient Greek City(AGC)はドクシアディスが深い親近感を抱いている古代アテネの歴史都市の形成と計画をエキスティックス方法で解明し、未来の計画への示唆を探った。

**2.3.2 エントピアの実践:** エントピア(Entopia)はドクシアディスが実現可能と思う良質な人間居住環境を指す。彼が最終期に到達した人間居住に対する信念は次の6点にまとめられる<sup>7</sup>。

①良質な人間居住にはエキスティックス対数分類による10段階のレベルがあり、それらの共同作業が必要。②都市建設には効率と同時に「行動の需要」を保証しなければならず、高速交通と歩行者道路が混在する安全でない地上交通は避けるべき。③高密度で低層な住区、公共交通を多く提供する必要がある、高層は不公平でコミュニティ建設を阻害するため避けるべき。④従来の都市は正常な成長でないため問題が発生した。理想的な都市発展の形は「ダイナポリス」という、中心部がインフラ軸に沿って放射線上に発展するリニア都市であるべき。⑤歴史的な都市はグローバル化した世界において文化の多様性を維持するのに役立つため一定割合で保存されるべき。⑥自然環境と人工環境のバランスをとるエキュメノポリスを作るため、自然環境破壊の危機に対処するため、土地、水、空気を含む世界共通の分類基準(自然保護区、耕作地、人間活動地域、工業地域)を国際的に承認することが必要。

**小結: 普遍化・国際化されていくエキスティックス**

「エキスティックス」の体系は、開発の専門家としてのドクシアディスの実践の中で形成されていき、途上国の問題と先進国の工業都市の問題を重ね合わせた。ドクシアディスは60年代から70年代にかけてエキスティックスの理論化やその普及に努め、エキスティックスは国際的な認知を獲得していった。ドクシアディスは人間居住の拡大とその未来をエキュメノポリスという概念でとらえ、それに対して人間の幸福や環境保全、歴史保存に重点をおいた人間居住の構築を提唱した。その議論や倫理が国際的に受け入れられた背景には、人間性や環境との関係を重視する同時代の欧米での都市論との共鳴があった。

### 第三章 エキスティックスの国際推進と国際浸透

#### 3.1 エキスティックスの国際推進

**3.1.1 エキスティックス推進のプラットフォーム:** 1958年にドクシアディスは「アテネ技術機構(Athens Technological Organization、ATO)」という組織を立ち上げ、居住問題や経済開発に関わる調査研究、人材育成などを開始するが、1963年には、先に紹介したエキスティックスに関わる活動に特化した新たな組織「アテネセンターエキスティックス(Athens Center of Ekistics、ACE)」を設立した。ATOやACEの代表的な活動の一つにエキスティックス国際大学院(Graduate School of Ekistics、GSE、1959-1971)がある。アーカイブの史料によれば、1959-71年の期間に受講した263人の学生のうち、欧米は62%、アフリカは5%、アジアは29%(パキスタンを除けば9%)、ラテンアメリカは2%、オセアニアは2%と世界各地から学生がアテネに集まっていたことがわかる。

**3.1.2 ドクシアディスと国際組織:** 1963年はドクシアディスのキャリアにおいて重要な年である。ACEの設立や世界の読者に向けた初めての書籍の刊行の他に、国際建築家連合(UIA)のパトリック・アバークロンビー賞の受賞や第1回デロス会議(Delos Symposia)の開催もこの年である。

UIAとの関わりでは1963年3月にアテネで「都市と建築の形態(form)と構造(structure)における東洋と西洋の相互作用」と題した会議を行った。また1963年1月、ニューヨークで開催された国連の住宅・建築・計画委員会ではドクシアディスはギリシア代表として参加して、「その委員会の名称をエキスティックスに変えよう」とまで言い出した<sup>8</sup>。こうした国際組織との関係が一層強まった時期でもある。

#### 3.1.3 Athens Ekistics Month(1963-1975)とデロス会議(Delos Symposia)(1963-1975):

国連の人間居住問題への対応の遅さに失望したドクシアディスは、自分で資金を調達して、1963年に都市化の世界的危機に関する討論会を独自に企画した。それがデロス会議である。1963-75年、毎年7月にACEが「Athens Ekistics Month(AEM)」を開催し、その期間中に行う討論会であり、人間居住をめぐる問題意識と知識を共有した。第1回会議には、国連関係者の他14国から社会学、人類学、生物学、都市計画の



図3 第1回デロス大会の様子

専門家及び政府官僚31人が参加した<sup>9</sup>。

#### 3.2 エキスティックスの国際浸透

**3.3.1 World Society of Ekistics(WSE):** 1964年の第2回デロス会議では、参加者の一人マーティン・メイヤーソン(Martin Meyerson)が「環境の基盤となる社会的、視覚的要素に対して同じ考えを持っている人は世界中にたくさんいる。彼らは、このような組織との関係によって大きな刺激を受ける」と述べて、当時既に存在したACEとは異なる組織として世界エキスティックス協会(World Society of Ekistics、WSE)の創設を提案した。研究、出版、会議等で人間居住に関する知識と発想の発展を図ることを目的としたWSEは、1965年に委員会が設立され、1967年に正式に成立した。この協会の設立は、エキスティックスや「人間居住」が既にドクシアディス個人の考えから国際的に浸透した思想となったことを象徴している。

**3.3.2 「国連人間居住会議」へ:** 1976年、国連による人間居住に関する最初の会議ハビタットIが開催された。ドクシアディスは1975年に亡くなったため、直接雄弁をふるえなかったが、この会議で出された「バンクーバー宣言」には、デロス会議参加者で構成された専門家委員会の中心人物の何人かが影響を与えている<sup>10</sup>。

**小結: 共有された問題意識**

ドクシアディスは自分の「人間居住科学」を絶えずブラッシュアップしていくと同時に、エキスティックスの概念や分析手法を国際的に広めていった。1968年にはWSEの成立、1976年にはバンクーバーで国連によるハビタットIの開催が実現したことは、「人間居住」の思想が個人の考えから国際討論の思想になったことを象徴している。

## 第四章 エキスティックスのアジアでの展開

従来の研究では、エキスティックスの国際浸透を国連人間居住会議に帰結させる傾向にあるが、本章ではそれと並行して 1970 年代以降にエキスティックスが及ぼした東アジアや東南アジアへのインパクトに注目する。

### 4.1 Japan Society for Ekistics (JSE)

第 1 回デロス大会(1963 年)に参加した日本の社会学者、磯村瑛一(1903-1997)はドクシアディス思想の日本人推進者として 1975 年に日本エキスティックス協会 (Japan Society for Ekistics, JSE)を設立した。JSE は、1971 年に名古屋に設立された国際連合地域開発センターの要員や経済学、社会学、地理学、地域計画、都市計画などの日本の専門家で構成されていた。磯村は毎回デロス大会での議論内容とドクシアディスのエキスティックスに関する論説を普及させることに努めた。1985 年につくばで開催された「人間・居住・環境と科学技術」をテーマとした国際科学技術博覧会にも JSE の活動はつながっている<sup>11</sup>。

### 4.2 アジアの留学生から APAC グループ

ティルウィットのハーバードでの同僚である榎文彦、都市デザインコースの学生であった長島孝一とシンガポールのウィリアム・リム(William Lim)の三人をベースに、タイのスメット・ジュムサイ(Sumet Jumsai)、香港のタオ・ホウ(Tao Ho)、インドのチャールズ・コレア(Charles Correa)などが加わり、1969 年に「APAC(Asian Planning and Architectural Consultants)」<sup>12</sup>という弛いグループが結成され、1985 年まで活動が続いた。このグループのメンバーは多くが WSE のメンバーであり、彼らの経歴もエキスティックスと密接な関係を持っていた。このグループの主張には人間を中心に据えた「居住性」とアジアの都市建築の文化的アイデンティティに対する意識がみられる<sup>13</sup>。

### 4.3 中国の「エキスティックス」

1978 年に改革開放された中国において、建築と都市をめぐる実践と議論は国際社会の歩調と一致していなかったが、エキスティックスに多大な影響を受けた人物が現れた。1978 年に清華大学建築系の主任に昇任した呉良鏞(1922-)である。彼は、改革開放後の建築領域における有力な人物であり、80 年代に「人間居住環境科学」を提唱した。このきっかけは、1984 年に出席したつくばでの会議であった。彼の著作『広義建築学』(1989)と『人居環境科学導論』(2001)にはドクシアディスの影響が明記されている。地域開発による大量住宅の供給、民居研究、文化アイデンティティに基づいた集落と旧市街地保存といった 1980 年代の中国の課題と、エキスティックスの理論が共鳴したのは自然ではなかったかと思われる。

#### 小結：変化した継承

エキスティックスの成果は 1975 年以降、東アジアや東南アジアで内容をやや変えながら潜在的に流通していた。エキスティックスの理論と思想は、1960 年代から 70 年代にかけて国際社会の関心事に触れたのみならず、特定の社会政治文化圏の変化に呼応したと言えるのだろう。

## 第五章 結：知識基盤化していた「人間居住科学」

### 5.1 源流をフィードバック：「周辺」から「世界を救う」

ドクシアディスによる人間居住科学「エキスティックス」の構築と発展の歴史を振り返ると、以下の示唆を得ることができる。

①ドクシアディスのエキスティックス理論の構築は、途上国の居住問題に端を発しており、同時代の建築・都市論

の議題も多く取り入れられた。その理論構築では、開発や発展が人間の幸福に貢献できるよう、「自然」「歴史居住地」「地方の居住実践」などを重視したが、そこには持続可能な開発思想の先見がある。1976 年のハビタット以前より途上国の貧困と潜在的な環境問題への認識を融合させる傾向を読み取ることができよう。

②ドクシアディス(と同時代の建築家と計画者)の理論において「都市」は重要であった一方、1976 年国連ハビタット I では、「人間居住」を受け入れたが、1996 年ハビタット II まで「都市」は注目の中心ではなかった。そのズレは、「都市」というトピックをめぐる学術領域と国際社会の関心領域の間のテンションを示す。

### 5.2 「人間居住科学」の生命力

国際事業としてのエキスティックスは、1960 年代から 70 年代にかけ、国境を越えた専門家のネットワークを構築するのみならず、変化していく継承の中で、アジア地域や各国で個別のコミュニティを形成した。また、国連の持続可能な人間居住アジェンダは今日広く浸透し、エキスティックスを受け継いだ専門家たちもそれぞれの領域内で生涯をかけて研究・実践を行っていた。エキスティックスという名詞はほとんど忘れ去られ、ドクシアディスの研究方法や彼の計画論は時代とともに限界と誤謬を証明されてきたにもかかわらず、その体系と領域は実際に今日の知識の基盤になっている。

### 5.3 「人間居住」に対する批判

行動にとって、「人間居住」の概念はあまりにも大きく抽象的である。ドクシアディス認識論の限界はこれまでしばしば指摘されている。国連人間居住の成果を振り返ると、その一つは、今やあまりにも「科学的」になってしまい、具体的な物質、場所、人々の感情や愛着を軽視することにつながる点である。しかし、筆者はドクシアディスのエキスティックスのなかには自己批判の可能性を残したのではないかと考える。エキスティックスの実践の中には、(特に歴史のある)場所からの経験と想像を用いて設計する願望が見られる。国際組織と国家主導の人間居住アジェンダの中でその点はより繊細に扱われるべきではないか。

<sup>1</sup> John G.Papaioannou (1976) 「C.A. Doxiadis' early career and the birth of ekistics」、『Ekistics』no. 247 (June 1976), pp. 313-319.

<sup>2</sup> 1958-60 ドクシアディス・アソシエイツによる記事、『Ekistics』

<sup>3</sup> C.A.Doxiadis, 1963、『Architecture in Transition』および C.A.Doxiadis, 1968、『Ekistics: An Introduction to the Science of Human Settlements』

<sup>4</sup> Ibid

<sup>5</sup> 『人間の都市』(Anthropopolis: City for Human Development, 1974)、『エクメノポリス世界都市』(Ecumenopolis: the Inevitable City of the Future, 1974)、『ビルディング・エントピア』(Building Entopia, 1975)、『人間居住の改善のための行動』(Action for Human Settlements, 1976) ということ。「赤い本」という言い方はそれらの本の序章で現れた。

<sup>6</sup> 『Ekistics』(1972, No.199, Title: 「A Better Future: Research Projects of the Athens Center of Ekistics」)を見る

<sup>7</sup> C.A.Doxiadis, 1975、『Building Entopia』と C.A.Doxiadis(Edited by Prof.Gerald Dix), 1976、『Ecology and Ekistics』

<sup>8</sup> Ines Tolić, 2022, 「News from the Modern Front」

<sup>9</sup> 「The Delians」、1963、『Ekistics』(1963, No. 95)と T. W. Fookes, 1987, 「Ekistics: An example of innovation in human settlements planning」、『Ekistics』(1987, No. 325/326/327)

<sup>10</sup> Susan Parnell, 2016, 「Defining a Global Urban Development Agenda」、『World Development』(No.78)

<sup>11</sup> 磯村瑛一、1981、「Notes on past activities of the Japan Society for Ekistics and on the program for Expo-Tsukuba」、『Ekistics』(1981, No.289)

<sup>12</sup> 長島キャサリンにより、Consultants は後に Collaboration に改称

<sup>13</sup> 1985 年『Ekistics』に掲載された文章「Architectural identity of cultural context: Reporting on a UNU/APAC」で反映される

#### 図版出典

<sup>1</sup> Jacqueline Tyrwhit, 1965, 「the journal of ekistics 1955-1965: analysis of its contents」、『Ekistics』(1965, No.110)

<sup>2</sup> C.A.Doxiadis, 1968、『Ekistics: An Introduction to the Science of Human Settlements』

<sup>3</sup> 「The Delos Symposium in Pictures」、1963、『Ekistics』(1963, No. 95)